

令和4年度

教職課程

自己点検評価報告書

福岡工業大学

令和6年4月

福岡工業大学 教職課程認定学部・学科一覧

- ・工学部
電子情報工学科 (高一種 工業)
生命環境化学科 (中一種 理科・高一種 理科・高一種 工業)
知能機械工学科 (高一種 工業)
電気工学科 (高一種 工業)
- ・情報工学部
情報工学科 (中一種 数学・高一種 数学・高一種 情報)
情報通信工学科 (中一種 数学・高一種 数学・高一種 情報)
情報システム工学科 (中一種 数学・高一種 数学・高一種 情報)
システムマネジメント学科 (中一種 数学・高一種 数学・高一種 情報)
- ・社会環境学部 社会環境学科 (中一種 社会・高一種 公民)

大学としての全体評価

本学の教職課程は、教員を志望する学生に対しての教員免許取得を保障するに十分な機能を果たしていると思われる。学生により添った支援が展開できている。ここ近年においては、教員免許状取得者のうち、教職を強く志望し、実際に教員になる者の割合がふえつつある。学生は、当然ではあるが、教員になることを強く求めて教職課程を履修し、教師になるための人間性・専門性・職業性をあぎなえる縄のごとく、向上を図るために学びを深めている。本学教職課程は、学生達の学びのニーズに応える努力を続けていることが、全体評価としてあげられる。

本学教職課程は、教育愛と使命感に満ちあふれ、生徒に「人間の在り方生き方」の根本を示す存在となりうる教師を目指すことを標榜しており、そのため授業に臨む学生の姿勢態度（「立つ腰」の姿勢）・身だしなみ、また社会的ルールを厳守する第一義的な時間厳守等を厳しく指導し、またそれを特色としてきた。

本学教職課程を経て免許を取得した学生には、心の軸のぶれない、骨太の教員として教職に就いていくことが期待される。

福岡工業大学

学長 下村 輝夫

目次

I	教職課程の現況及び特色	1
II	基準領域ごとの教職課程自己点検評価	2
	基準領域 1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な 取り組み	2
	基準項目 1-1 教職課程教育の目的・目標の共有	
	基準項目 1-2 教職課程に関する組織的工夫	
	基準領域 2 学生の確保・育成・キャリア支援	5
	基準項目 2-1 教職を担うべき適切な人材(学生)の確保・育成	
	基準項目 2-2 教職へのキャリア支援	
	基準領域 3 適切な教職課程カリキュラム	7
	基準項目 3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施	
	基準項目 3-2 実践的指導力育成と地域との連携	
III	総合評価	9
IV	「教職課程自己点検評価報告書」作成プロセス	9
V	現況基礎データ一覧	10

I 教職課程の現況及び特色

1 現況

- (1) 大学名：福岡工業大学
- (2) 所在地：福岡県福岡市東区和白東 3-30-1
- (3) 学生数及び教員数（令和4年5月1日現在）

学生数：教職課程履修 86 名／学部全体 4,149 名

教員数：教職課程科目担当（教職・教科とも）9 名（非常勤含む）／学部全体 144 名

2 特色

本学教職課程では、2022 年度には 86 名の学生が教職課程を履修した。生命環境化学科が 25 名と他学科と比較して多数であり、情報工学科でも履修者は多い。教職課程の「教育の基礎的理解に関する科目」等及び「教育の実践に関する科目」は主として教職課程専任教員が担当している。「各教科の指導法」に関する科目は、社会科・公民科に関しては本学教職課程専任教員が、数学科，理科，情報科，工業科については主として非常勤教員が担当しているのが現状である。教職課程専任教員が担当する「教育の実践に関する科目」のうち「教育実習Ⅰ・Ⅱ」は、少人数で実施され、きめ細かな指導が行われている。本学教職課程では福岡県及び福岡市教育委員会の策定する「教員育成指標」の養成期の指標を考慮しつつ、本学で設定されている「教育研究上の目的」（教員養成の目的）と教育目標（教員養成の具体的な目標）に基づき、指導を行っている。履修学生の多くが教職に就く意志を明確にし、教職課程の講義に臨んでいるが、自らの教職に対する志と外面に現れる言動・姿勢態度が乖離している学生も散見されるため、教職課程の学生には生徒に対して「人間の在り方生き方」の手本を示す存在となってもらうよう、将来の教師としての「自覚」と「覚悟」をもって、平素から努力することを求めている。教職課程の学生は、4 年次の教育実習までに、教師にふさわしい姿勢態度、服装、身だしなみ等を体得・体現しておくことを、（実習校から）求められている。今年度も、授業規律の確保と、教職学生にふさわしい言動、服装・姿勢態度、身だしなみの指導を行った。4 年生には、教育実習事前指導において、模擬授業の授業力向上と指導者としての在り方について表裏一体的な指導を行った。

II 基準領域ごとの教職課程自己点検評価

基準領域 1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

基準項目 1-1 教職課程教育の目的・目標の共有

〔現状説明〕

教職の意義、教育の原理及び人間の発達を理解し、将来の教育者としての専門的知識、方法技術さらに実践的能力を高めるとともに、使命感及び倫理観と教育的愛情を育む人材の養成を目的とする。本学の教職課程では、福岡県及び福岡市教育委員会の策定する「教員育成指標」の養成期の指標を考慮しつつ、既に設定されている「教育研究上の目的」（教員養成の目的）と教育目標（教員養成の具体的な目標）に基づき、教育を行っている。

〔長所・特色〕

教職課程の履修学生は、将来の教師としての「人間の在り方生き方の手本を示す存在」となるべく「自覚」と「覚悟」をもって、平素から努力することが求められる。4年次の教育実習までに、教師にふさわしい姿勢態度、服装、身だしなみ等を体得・体現しておくことが実習校から求められている。今年度は、より徹底した授業規律の確保と、教職学生にふさわしい言動、服装・姿勢態度、身だしなみの指導を行う。

〔取り組み上の課題〕

本学における教職課程は、教師になるという高い志のもとに、あえて追加的な多くの単位を取得し教員免許状の取得をめざす学生のための、オプションの課程である。そのためにもこの教職課程を履修するという確固たる強い自覚と覚悟が求められる。特に教員免許状取得のためには、学校現場での教育実習が必須である。教育実習は、学校現場として、教師として指導者として、生徒に向き合い教育活動を展開する必要がある。そのためにも教師にふさわしい服装・姿勢態度・行動が2年次の段階からは本格的に求められる。したがって、より一層、自覚と覚悟を促し姿勢・態度・行動に教師にふさわし

いような変容がみられるように徹底した指導を行っていききたい。その際、学生自らに絶えず反省の矢印を向けさせながら、自己改善・自己向上・自己成長を促していききたい。

基準項目 1－2 教職課程に関する組織的工夫

〔現状説明〕

教職課程の運営は、教職に関する科目を含む全学の教養教育カリキュラムの編成、運営ならびに教育実践の改善に取り組む組織である教養力育成センターの内部組織として教職課程委員会を中心になされている。教職課程委員会は、教務部長、学生部長、教職専任教員、各学科から選出された教職課程委員を構成員として、教職カリキュラム及びその履修に関する事項、教育実習に関する事項、教員免許状の申請及び交付等について審議を行う。具体的な審議事項は以下の通りである。

(福岡工業大学教職課程委員会規程 第 2 条)

- (1) 教職カリキュラム及びその履修に関する事項
- (2) 教職課程履修学生の認定に関する事項
- (3) 教育実習に関する事項
- (4) 免許単位修得の認定に関する事項
- (5) 教職免許状の申請及び交付
- (6) 教職課程遂行に必要な予算に関する事項
- (7) その他教職課程として重要と認める事項

また、教職課程担当教員の学校現場等での実務経験については、年数的に浅いものの、教育実習訪問指導時における学校内視察や学校現場教員との面談・意見交換を通して、また高等学校からの依頼による高校生を対象とした出前講義の実施、あるいは教育委員会から委嘱された学校現場評価委員活動などを通して、学校現場における教育実践感覚の涵養を図っている。加えて、教職課程担当教員の FD 研修については、全国私立大学教職課程協議会（全私教協）や九州教職課程連絡協議会（九教協）の年次大会や秋季の研修会を活用している。

〔長所・特色〕

教職課程 3 名の専任教員は、専門学科の教員の協力も得ながら、実習校の訪問を分担協力して実施し、担当学生の実習校での活動を視察するとともに、学校現場の校長・教頭・担当教諭との意見交換等を通して、教職課程担当教員としての学校現場に即した実践的指導力の涵養を図ることができた。教育実習校の現場感覚を涵養することは、教職課程担当教員に求められる必須の力量であり、今後も益々磨いていくことが肝要であるが、教育実習生に対する教育実習校訪問指導については、当該学生に対する事前・事後の指導を含めて、学生に寄り添った活動に一定の成果が見られた。

〔取り組み上の課題〕

今年度も可能な限り教育実習訪問指導等を中心として、学校現場に足を運び、学校現場での教育環境はもとより教育・指導の実態を視察し、学校現場教員との意見交換の場を積極的に増やし、教職課程教育の実践力の向上を図る。また FD 研修の場としての全私教協及び九教協の年次大会・研修会に積極的に参加し、教職課程教育並びに教職課程運営の最新動向の知見を深める。教職課程担当教員が、これからもより一層積極的に教育実習校との連携を図りながら、学校現場との交流の機会と場の確保に努めていきたい。教育実習訪問指導にあたっては、教職課程 3 名の教員が訪問担当学生を事前に明確にし、訪問担当学生に対する事前指導・訪問（事中）指導を各教員が入念に実施する体制の確立を図る必要がある。

基準領域2 学生の確保・育成・キャリア支援

基準項目2-1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成

〔現状説明〕

学生の履修の確保については、1年次後期の教師論で、教職の意義・魅力等を含め教職の全体概要ついて講義を行い、教師論の単位取得と教師論を除き1年次修了時に40単位以上を取得していることを履修条件として、教職課程の登録を行わせている。例年、履修条件を満たした学生で実際に教職課程の登録を行う学生は6割程度となっている。教職課程における履修指導については、教職担当（兼務）の教務課職員が、常時入念な指導を行っている。教職担当教員も、1年次後期開講の教師論での講義内や、年度始め、学期始め等に適宜ガイダンス等を行っている。教職一本の学生については、別途、教職課程教員が教員採用試験対策講座（主に二次の模擬授業・面接対策）を解説し、指導にあたっている。

〔長所・特色〕

学生の履修確保については、1年次後期の教師論で、現代学校教育の動向、教員の採用動向について、また本学教職課程の教員養成教育の具体展開について、加えて教職の魅力・醍醐味についても重点的に講義をし、教職課程履修へのモチベーションを高めている。年度末の2月、及び年度始めの4月の教職課程ガイダンスの指導については、教職・協働で内容の充実化を図ることができた。加えて日常の教職指導についても教職協働で行うことができ、着実に充実度を増している。

〔取り組み上の課題〕

教師論の講義では、1年次の学生の毎回の授業の振り返りのミニツツペーパーの内容から、講義の回を追うごとに教職に対する厳しさの認識とともにやりがい・醍醐味を実感する学生が増えてきた。2年次の学生については、本格的な教職課程の履修となる最初の学年ではあるが、教職に対する取組の甘さが目立つ学生が多くみられた。3年次の学生については、特に後期の授業科目の特別活動・総合的な学習に関する科目や生徒・進路指導論等の教育実践に即した科目や教科教育法における模擬授業の実施などで、教

育実習に向けての準備教育を着々と進めることができた。しかしながら、今年度の課題としては、まだまだ、教職課程履修学生に対する、教職課程を履修する上での自覚と覚悟が不足、4年生においても教育実習の事前事後の指導の段階において、自覚と覚悟の欠如とみられる姿勢態度・行動が散見された。新年度から、2年次にあっては正式な教職課程の履修、3年次にあっては本格的な教職課程の履修、4年次にあっては教育実習の事前指導と教員採用試験の準備がスムーズに展開できていくように、2月・4月のガイダンス指導の重点化が求められる。2年次以降、すべての教職課程履修学生の「本気度」が姿勢態度・行動ひいては学修成果にあらわれるように、取り組みを進めていきたい。

基準項目2-2 教職へのキャリア支援

〔現状説明〕

教職一本の学生については、別途、教職課程教員が教員採用試験対策講座（主に二次の模擬授業・面接対策）を解説し、指導にあたっている。

〔長所・特色〕

3年次にあっては、来年度の教職への就職の準備に向けて、県教育委員会及び指定都市教育委員会の教員採用試験に関する特別選考や一般選考の情報をいち早く提供し、教職一本の学生の準備、教育の支援を行う。4年次の教職一本の学生に対しては、教育実習訪問指導の際に、学校現場の教員（できれば管理職）に対して、その旨を伝えるとともに、教員採用試験の直前対策講座（二次面接対策）を開設し、合格への支援を行う。年度末の2月、及び年度始めの4月の教職課程ガイダンスの指導については、教職・協働で内容の充実化を図ることができた。加えて日常の教職指導についても教職協働で行うことができ、着実に充実度を増している。

〔取り組み上の課題〕

4年次の学生には、教員採用試験の直前対策、また二次対策、加えて教職関連大学院進学指導の充実化により、具体的な成果をあげることができた。

取り組み上の課題としては、本学は工業大学であり、工学部1学部時代から、永きにわたって工業科教員を養成し、学校現場に送り出してきた。しかしながら、近年は、工学部の専門学科のカリキュラムと教職課程との両立の困難性から、学生で工業科の教員免許取得を希望する学生が減少傾向にある。また数少ない工業科教員免許取得者もそのほとんどが企業に就職しているのが現状である。一方、専門高等学校現場の、本学に対する工業科教員免許状取得者のニーズは高くなっている。今後は、工学部の学生の中から、一人でも多く教職を希望する学生を見出し、教職課程履修に導き、専門学科課程と教職課程との両立を継続し、免許状取得が成就できるように、指導・支援を工夫していくことが必要である。

基準領域 3 適切な教職課程カリキュラム

基準項目 3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

〔現状説明〕

教育の基礎的理解に関する科目等については、1年次に教職課程の導入科目としての教師論を配置し、2年次前期には教育原理、教育の方法とICT活用、教育心理学、道徳教育論、2年次後期には教育行政学、教育相談の基礎、3年次前期には特別支援教育論、3年次後期には生徒・進路指導論、特別活動・総合的な学習の時間の指導法、4年次には前期・後期通年にわたって教育実習Ⅰ・教育実習Ⅱを、4年次後期には教職実践演習を開講している。教科の指導法に関する科目については、3年次に教科教育法Ⅰ～Ⅳを効果的に配置している。

工業科については、3年次前期に職業指導、工業科教育法Ⅰ、後期に工業科教育法Ⅱを、理科については3年次前期には理科教育法Ⅰ・Ⅱ、後期に理科教育法Ⅲ・Ⅳを、数学科については3年次前期には数学科教育法Ⅰ・Ⅱを後期に数学科教育法Ⅲ・Ⅳを、情報科については、3年次前期に情報科教育法Ⅰ、後期に情報科教育法Ⅱを、社会科・公民科については、3年次前期に社会科教育法Ⅰと社会科・公民科教育法Ⅰを3年次後期に社会科教育法Ⅱ、社会科・公民科教育法Ⅱを配置している。

〔長所・特色〕

毎年、教育実習の事前事後指導にあたっては、事前指導では模擬授業用の学習指導案集、事後指導では実習校での研究（評価）授業の学習指導案集を冊子化して、学生の事前事後指導の共通教材として活用している。

〔取り組み上の課題〕

今年度は、教育実習事前指導・事後指導において、特に学生による模擬授業を例年以上に計画的かつ徹底的に実施することができた。更なる模擬授業の充実のためにも今後は、40人程度の学生を収容でき、なおかつ、黒板に加えての電子黒板を含めた学校現場と同等の設備環境を有した教室の確保が求められる。教職課程の授業やその他の指導

に適した施設・設備の充実化、いつでも学生が主体的な意志のもとに模擬授業を実施し、学生相互による互見を通して学び合い、お互いの向上を図りあうための施設、また学生がいつでも必要とする資料・情報を入手できる教職専用の施設の確保が求められる。

基準項目 3-2 実践的指導力育成と地域との連携

〔現状説明〕

福岡市教育委員会と教員採用特別選考にかかる連携協定を結び、候補学生の推薦等を行っている。教育実習等の実施にあたっては、実習学生全員の実習校と連絡をとり、研究（評価）授業参観及び学校現場教員との意見交換を中心とした実習校訪問指導を行っている。4年生を対象として、教育実習事前・事後指導、教職実践演習の講義において、城東高等学校の教務主任をはじめとする複数の教員をゲストスピーカーとして招聘し、学習指導や生徒指導、担任としての指導に関する実践知を高めている。

〔長所・特色〕

今年度は、福岡市教育委員会の教員採用特別選考に応募した学生が合格を果たした。ゲストスピーカーについては、城東高等学校から3名の教員を招聘し、授業力、生徒指導力、担任力・部活動指導力等の涵養を図るべく、現場の実態に即した実践的な講話を得ることができ、教育実習を終えた学生の有益な学びとなった。

〔取り組み上の課題〕

今年度は福岡市教育委員会のみならず、北九州市教育委員会とも教員採用の特別選考にかかる連携を進めてきた。福岡市教育委員会については、来年度の教員採用特別選考に向けての学生の応募者を確定し、手続きを本格的に開始している。本年度、ゲストスピーカーとしては、城東高等学校教員のための招聘となった。来年度以降は、福岡県教育委員会と連携して、県教育委員会から福岡県の中・高の教員及び校長を経験している方を招聘する予定である。今後は福岡県教育委員会及び福岡市教員委員会教育センターとの関係性をより深め、学生が大学にいながらして学校現場を臨場感をもって学ぶことができるように、県教育委員会、市教育センターからの出前講義の受け入れを積極的に検討したい。

Ⅲ. 総合評価

本学の教職課程の特色は、「人間としての在り方生き方」の手本を示す存在としての教師を養成することであり、そのため、授業に臨む服装を含めた身だしなみ、姿勢態度、言動や挨拶の励行、授業や特別プログラムに臨む際の時間厳守等を学生に徹底して指導している。そのようにして「鍛え・錬り・磨き」あげられ、指導者としてのぶれない軸の基盤を形成した学生が教職現場で一定の評価を受けてきた。

しかしながら、近年において、教職の意欲は高く、教師としての人間的な資質向上に努力をしている学生の中にあっても、教科の基盤をなす専門学科の学力が不十分な学生が散見されるようになってきた。著しい場合は、教職の授業科目は、着実に単位取得できても、専門学科の単位が取得できずに留年を余儀なくされ、教職を断念する学生も散見されるようになってきた。今後は人間性と専門性と職業性をより一層あぎなえる縄のごとくに調和的に向上させていくことが課題である。

Ⅳ 「教職課程自己点検評価報告書」作成プロセス

教職課程担当の3名の教員が協議の上作成し、その後、教務課と調整し教職課程委員会の議をへて完成とした。

V 現況基礎データ一覧 (2022 年度実績)

令和 5 年 5 月 1 日現在

法人名 学校法人福岡工業大学					
大学・学部名 福岡工業大学 工学部・情報工学部・社会環境学部					
学科・コース名 (必要な場合) 工学部電子情報工学科、工学部生命環境化学科、工学部知能機械工学科、工学部電気工学科、情報工学部情報工学科、情報工学部情報通信工学科、情報工学部情報システム工学科、情報工学部システムマネジメント学科、社会環境学部社会環境学科					
1 卒業者数、教員免許状取得者数、教員就職者数等					
① 昨年度卒業者数					935
② ①のうち、就職者数 (企業、公務員等を含む)					835
③ ①のうち、教員免許状取得者の実数 (複数免許状取得者も 1 と数える)					30
④ ②のうち、教職に就いた者の数 (正規採用+臨時的任用の合計数)					12
⑤ のうち、正規採用者数					8
④ のうち、臨時的任用者数					4
2 教員組織					
	教授	准教授	講師	助教	その他 ()
教員数	82	39	3	18	
相談員・支援員など専門職員数					